濃飛流紋岩

HP　岐阜の地学

岐阜大学教育学部理科教育（地学）講座　小井土 由光　より

恐竜が地球上で最も繁栄していた頃，日本列島ではかなり激しい火山活動が起こっており，それによって中部地方にもいくつかの岩体が形成された．濃飛流紋岩，大雨見山層群，笠ヶ岳流紋岩，奥美濃酸性岩類などと呼ばれる岩体がそれらにあたる．なかでも濃飛流紋岩は，南東端にあたる恵那山付近から北西端にあたる白川村地域にいたる広大な地域に分布する巨大な火山岩体である．岐阜県の面積の1/4ほどを占める地域に広がっており，その名が示すとおり美濃と飛騨にまたがる地域を覆いつくす岩体である．
濃飛流紋岩は，中生代の白亜紀後期から新生代の古第三紀へかけての時期にあたる約8000万年前から約6000万年前までの2000万年ほどの期間をかけてできた岩体である．火山噴出物が積み重なってできた岩体であることは間違いないが，御嶽山や乗鞍岳のような火山体のイメージとはほど遠いものである．遠くから眺めても山体の姿が描けるわけではない．われわれの目にはただ堅固な岩石が延々と広がっているだけのものとしか映らない．当時の様子を復元することは簡単なことではないが，径数十kmにも及ぶ巨大な陥没盆地（コールドロン）を形成し，その中に大規模な火砕流が噴出して堆積物を厚く積み重ねていった．それらは，1991年の雲仙普賢岳における火砕流噴火とはくらべものにならないほどきわめて大規模な，おそらく地質学上でも最大規模に属する火砕流と考えてよい．それらは厚い溶結凝灰岩として数十kmにわたり広がって分布している．

広大な地域に分布する岩体の調査は1960年頃から本格的に始まったが，1970年頃までは現在のように自動車で自由に動き回れる時代ではなかった．調査はもっぱら公共交通機関としての路線バスが利用された．そのバスこそ“濃飛バス”であり，そのお陰で成果が蓄積されて行ったことから，この岩体が濃飛流紋岩と命名された．